

池田大作

宇宙と



地球と

人間



アレクサンドル・セレブロフ

池田大作

Ikedata Daisaku

宇宙と



地球と

人間



アレクサンドル・セレブロフ

Alexandre Serbriov

宇宙と地球と人間

二〇〇四年十一月十八日 初版発行

著者 アレクサンドル・セレブロフ

池田大作

発行者 西原賢太郎

発行所 株式会社 潮出版社

〒一〇二一八一一〇 東京都千代田区飯田橋三一一三

電話〇三三三三三〇〇七八一（編集部）

〇三三三三三〇〇七四一（販売部）

振替〇〇一五〇五六一〇九〇

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Alexandre Serebrov, Daisaku Ikeda 2004,

Printed in Japan

ISBN4-267-01720-4 C0095

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

[<http://www.usio.co.jp>]

宇宙と地球と人間／目次

まえがき 池田大作 1

尊敬する読者へ アレクサンドル・セレブロフ 7

第一章 壮大なロマン「宇宙」——少年時代の夢と感動 17

第二章 宇宙飛行士への道——必要条件と訓練の日々 53

第三章 人類の英知の結晶——宇宙ステーション 95

第四章 宇宙のフロンティアへ——先駆者たちの挑戦 135

第五章 地球は生きている——宇宙を貫く法則 169

第六章 尊き生命の揺籃を守れ——環境破壊を防ぐ知恵 205

第七章 「宇宙哲学」の時代へ——万物との共生目指して 241

第八章 「生命の海」宇宙——仏法からのアプローチ 277

第九章 生命の起源と進化——壮大な宇宙のドラマ 313

第十章 大宇宙との対話——生命の永遠性をめぐって 349

第十一章 生命は限りなく尊い——宇宙からの視座 375

まえがき

人類初の宇宙飛行士ガガーリンが宇宙への一步をしるしてから四十余年——。人類は今、無限の宇宙への探究を、さらに大きく広げようとしている。

「宇宙時代」の開幕は、どのような未来の地平を開いていくのか。次々と解明されていく宇宙の姿は、人類に、どのようなメッセージを伝えるのか。そして、「宇宙時代」を生きゆく私たちは、どのような生命観、世界観を必要としているのか。

人類文明の転換点に立つ二十一世紀にあつて、こうした視点こそ避けて通れない重要なテーマであると、私は、かねがね考えてきた。

その一つの解答を模索すべく語り合つたのが、この対談である。

セレブプロフ博士は、ロシアの宇宙飛行士として、一九八四年から九四年までの十年間に、

四度の宇宙飛行を成し遂げられた。宇宙ステーション「サリユート」「ミール」で、合計三七三日間、宇宙に滞在した。宇宙での船外活動も一〇回を経験され、最多の宇宙遊泳記録者としてギネスブック（九三年版）にも掲載された、宇宙飛行の第一人者である。

また、博士は、「ミール」の開発にも携わった、優れた物理学者でもある。現在は、全ロシア宇宙青少年団「ソユーズ」の会長として、未来を担う世界各国の子どもたちへの宇宙教育や環境教育に尽力されるなど、幅広い活躍をされている。

ご夫人のエカテリーナさんも、著名な「モイセーエフ国立民族舞踊団」のソリスト（第一舞踏手）を長年、務めてこられた芸術家である。

ご夫妻と初めてお会いしたのは、二〇〇〇年十月の一夕、月光の美しい秋の東京・八王子であった。

「外なる宇宙」への探究と、「内なる宇宙・生命」への探究——。私たちの語らいは、宇宙と地球と人間をめぐって、談論風発して尽きるところがなかった。

その日の会を終えるに際して、私たちは、今後も対話を継続し、対談集を発刊するこ
とで一致したのである。

以来、私たちの対話は、世紀を超え、約三年間にわたって重ねられた。

テーマは多岐にわたった。

宇宙飛行士になるための挑戦、宇宙への飛翔、未知なる宇宙体験、宇宙から見た地球環境――。臨場感にあふれる話の数々は、いずれも先駆者の証言として重みをもつものばかりであった。

さらに、「宇宙は有限か無限か」「宇宙に始まりや終わりはあるか」「生命の誕生と進化」、そして「宇宙を貫く法則」など、語らひは幾重にも弾み、哲学的な内容へと広がっていった。

セレブروف博士との「宇宙対話」はじつに楽しく、心が晴れ晴れと広がる、有意義な得難い一時であった。

対談の結びには、エカテリーナ夫人にも加わっていただき、貴重な証言をさまざまに語っていただいた。

これらの内容は、雑誌『潮』誌上で、十一回にわたって掲載された。各界から大きな反響をいただいたが、なかでも十代、二十代の若い読者から多くの声が寄せられたことを、セレブروف博士も私も、何よりの喜びとした。

二十一世紀を生きゆく青年たちこそ、宇宙に広々と心を広げ、地球を大きく見つめ、人間と生命を深く探究していつてもらいたい。これが、氏と私の共通の願いだからである。

宇宙飛行士、また天文学者との対談は、啓発に満ちている。

史上初の女性宇宙飛行士テレシコワ氏。アメリカのスカイラブ計画の飛行士カー博士。アポロ・ソユーズ計画に参加されたスレイトン博士。そして、ウィルソン山天文台所長のジャストロウ博士。地球外生命の探索「SETI計画」を提唱されたセーガン博士。また、イギリスの高名な天文学者であるホイル博士と、その弟子のウィックラマシング博士。さらに、物理学者でもあるモスクワ大学前総長のログノフ博士……。

いずれの方々との語らいも忘れたくない。

共通するのは、皆、素晴らしい人格の方々であつたということである。

宇宙に眼を開くことは、人間自身を識ることであり、そして地球人としての意識に目覚めることにつながる。それは、「外なる宇宙」と「内なる宇宙」を貫く普遍の法則に迫りゆく契機となるのではないだろうか。

哲人・ソローの詩的な一節を思い起こす。

「われわれが毎日太陽の昇るのと沈むのを真心まごころこめてながめ、宇宙の事実とわれわれ自身を関係づけるようにすれば、われわれを、永久に正気しやうきに保って行けるのです」（山崎時彦訳『市民的抵抗の思想』、未来社）

人類を一つに結ぶ「宇宙哲学」を探究した私たちの対談が、とくに青年たちにとって、地球人、宇宙市民としての人類意識を育む一助となるならば幸いである。

二〇〇四年十月六日

セレブロフ博士ご夫妻と初めて語り合った思い出の日に

池田大作

尊敬する読者へ

この本を手にもされるすべての読者に、私、アレクサンドル・セレブロフからの深い感謝と尊敬を表したい。

世界のさまざまな国を訪問してきたが、日本ほど私が心ひかれ、頻繁に訪問した国はない。ロシア人の私は、貴国の文化（じつは食文化も含めてだが）、習慣、清潔さが好きだ。

プチャーチン提督の使節団は、イワン・ウニコフスキー艦長の指揮するロシアのフリゲート艦「パルラダ」で、一八五三年、日出ずる国、日本を訪問した。この出来事が、二百年に及ぶ日本の鎖国政策に終止符を打つひとつのきっかけになったことを、私は誇りに思っている。以来、ロシアは、常に貴国の文化と成果に目を見張り、今日なお、驚嘆し続けている。（ちなみに、我が家の電化製品はどれも日本製、私の腕時計も日本製だ。）

私が、子どもたちの教材として「宇宙からの授業」を作成するアイデアを提唱し、そ

れが我が国の国家プログラムとしてエリツイン大統領に承認しやうにんされたとき、その実施じっしのための資金を提てい供きようしてくれたのも、日本の方々だった。

さて一方、かのフリゲート艦「パルラダ」は、長崎で英仏艦隊かんたいに撃沈げきちんされてしまう。この史実に憂鬱ゆううつになるのは私ひとりだろうか？

ソ連の国家元首げんしゆが一九四五年の終戦後初めて訪日し（九一年）、ゴルバチョフ大統領と海部かいふ（俊樹としき）首相との歴史的首脳会談しゆのうが行われたとき、交渉こうしやうは行きづまりを見せていた。

このときに、長嶋（茂雄）さんなどと私で、「ワールド・チルドレン・フェスティバル」を実施し、世界三五カ国の子どもたちが記者会見をしたのだ。このイベントの直後に、海部氏とゴルバチョフ氏は、一晩で二二の文書に調印ちやういんした（日本では一五と報道されたが、どちらにしても充分な数だ）。というわけで、両国の交渉を袋小路から救い出すのに、私も一役を担ひとやくえたと自負ひとなしている。自分はいわばプチャーチン提督の使命を二十一世紀に継承けいする役目を担った人間だと考えている。そういつて差し支つかえないと思う。

事実、我が人生最大の出会いを日本で経験した。私は、これまで多くの偉大いだいな人とのさまざまな素晴すばらしい出会いをもてた人間だと思っている。それらの人物を比較対比ひかくたいひすることはしたくない。また必要もないだろう。しかし、数多くの偉大な人々の中でも、まった

く桁違いの、比類なき人物が一人いる（氏自身はそのことに気がついていない。そして、私
が氏を「人生の師」と仰いでいることも知らない）。その人こそ池田大作先生である。

私たちは対談をした。池田先生は、宇宙について私にたくさん質問を寄せられた。そ
して、私は、その質問に深く啓発されていた。対談者が日本人であるとか、何人である
とかは、さして大きなことではない。大事なのは、その人が何を成し遂げ、何を残したか
だ。ロシアの学者ツイオルコフスキーは、「宇宙は新たな哲学をもたらす」といったが、
私の場合、四回の宇宙飛行を通じて私が経験したことの内実を吟味し、まさに新たな人生
哲学に昇華しえたのは、池田先生という並外れて魅力的な、傑出した深い人格と出会い、
語り合えたからにはかならない。

私と池田先生との語らいは『潮』誌上で連載され、読者から大きな反響が寄せられた
と聞いている。これは、ひとえに対談の相手をしてくださった池田先生のおかげだと思っ
ている。池田先生の質問は、私に多くのことを考えさせ、私の中から答えを引き出して
くれたのだ。だから、私は、本当の自分をありのままに語ることができた。

親愛なる池田先生に、心から感謝申し上げたい。池田先生は、師匠である牧口（常三
郎）先生と戸田（城聖）先生の真の後継者だ。創価学会が目指すものに私は心から賛同し、

その哲学に共鳴する。大宇宙と小宇宙である人間が一体であることを説く縁起の考え方は、人間が自然と共存するために、ぜひとも必要なのだ。地球と宇宙は、別々には存在しえない。ゆえに地球上の生命もまた、宇宙に起こっている森羅万象から切り離すことはできない。だから、宇宙は「制覇するべきもの」ではないのだ。池田先生の主張されるとおりである。人間は、宇宙のリズムと共鳴し、自然との調和を奏でていくべきなのだ。読者の皆さまへ、……池田先生との対話によってできあがった本書の中で、私の言葉には嘘も虚飾もないことを誓う。フライトエンジニアはけっして嘘をいわないことを。

二〇〇四年十月四日

人類初の人工衛星が打ち上げられた記念日に

あなたのロシアの友人

宇宙飛行士

アレクサンドル・セレブロフ

宇宙と地球と人間／目次